【　　】

氏名	中村　暁子
授与した学位	博　　士
専攻分野の名称	文　　学
学位授与番号	博甲第２６７３号
学位授与の日付	平成１６年　３月２５日
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 （学位規則第４条第１項該当）
学位論文題目	日本語における助詞重複構文の研究
学位論文審査委員	主査・教授　江口　泰生　教授　辻　　星児 助教授　田仲　洋己　助教授　宮崎　和人 岡山大学名誉教授　下河部行輝

学位論文内容の要旨

本論文は、中村暁子の修士論文（第２部第１章相当）、既発表論文４篇（第１部第２章相当、第２部第１章相当、第２部第２章、第３部第１部相当）、口頭発表を元に、全体を組織だて、整合性をはかって、統一的な観点から記述されたものである。古代語において一文中に同一助詞（ガやヲやニ）が重複する構文―筆者はこの構文を「助詞重複構文」と称する―が広範に見られることを指摘し、その用例を探索・収集、用法を整理・一般化したものである。この文型は説話に限られた特殊なものであるという先行研究の指摘を覆し、また助詞重複構文が現代語では不可能であるのに対し、古代語では可能だったことを示し、その理由を述べたものである。

論文は序論、本論、結論から構成され、本論は３部構成で、各部がそれぞれ２章に分かれる。Ａ４ワープロ打ちで 40 字×34 行で、190 枚（原稿用紙に換算して 646 枚相当）に及ぶ。本論文の目次は次のとおり。

序論
本論　日本語における助詞重複構文の研究
第１部　古代語における助詞重複構文
　第１章　二重ヲ格構文
　第２章　二重ニ格構文
第２部　古代語における助詞重複構文とその関連形式
　第１章　「～ヲバ～ヲ」文
　第２章　「～ノ～ヲ」文
第３部　現代語における助詞重複構文
　第１章　二重ヲ格構文
　第２章　二重ニ格構文
結論
参考文献

まず序論において、助詞重複構文を「二つ以上の同じ助詞が同一述語に呼応する文」と定義した。次にこの構文に関する松尾拾・山田忠雄などの僅かな先行研究を発掘して、「説話における特殊文型」というように先行研究で位置付けられていることを示し、研究が十分行われていない現状を指摘した。更に用例を収集した範囲や方法を述べた。

本論第１部では古代語における助詞重複構文を、二重ヲ格（ＡヲＢヲＶスル）、二重ニ格（ＡニＢニＶスル）に分けて、用例を広く探索・収集し、用法を整理した。従来の研究では、特に「～ヲ～ヲ」だけを対象とし、こうした助詞重複構文は今昔物語などの説話、或いは説話的な文体（竹取物語）にだけみられる特殊形式とされてきた。また「～ヲ～ヲ」文と「～ヲバ～ヲ」文との差異が明確にされていなかった。こうした理由もあって僅かな研究しかなく、また国語学界では助詞重複構文が存在するということも認知されてこなかった。

しかるに本論文では説話にとどまらず、和文・説話・抄物・外国資料など広い範囲を探索し、助詞重複構文を発見し、更に「～ヲ～ヲ」だけでなく、「～ニ～ニ」などの助詞重複が見られること、説話の特殊形式ではなく、むしろ古代日本語に広く行われていた可能性があることを示した。その用法もかなり整理することができ、Ａで全体を、Ｂでその一部を示すというのが中心的な用法であることが判明した。こうして助詞重複構文が古代日本語に実際に広範に行われている可能性が明らかにされた。上代においては散文資料が少ないために明らかにしにくいが、それ以外の時代においては平安・鎌倉・室町時代の資料に用例があり、おそらく古代を通じて助詞重複構文が行われていた可能性があることを指摘した。

第２部では、「～ヲ～ヲ」構文と密接な関係を持つと考えられる「～ヲバ～ヲ」文や「～ノ～ヲ」文を取り上げた。密接な関係を持つことは形式上容易に想像されるが、具体的にどのような関係なのかという点については、これまで明らかではなく、「～ヲ～ヲ」構文と同一のものとして扱われてきた。しかし検討の結果、「～ヲバ～ヲ」文は、「幼い者をば水に入れ土に埋み、大人しい者をば首を切る」のように対比的な用例が極めて多いことが指摘された。また本章では和文・説話・漢文訓読文・抄物・外国資料などを広く丹念に調査して、やや硬い説明口調の場面で出現することが指摘された。この結果から、「～ヲ～ヲ」文を主題化した構文であることが導かれた。

第２部第２章では「～ノ～ヲ」文との関係について論じた。「～ヲ～ヲ」文が全体・部分関係からなるのが中心的な用法であるが、「～ノ～ヲ」文はそれ以外の用法（ＡとＢが例示・総体関係をなす用法）も多いことが指摘された。

第３部では現代語における助詞重複がどのように行われているかを調査したものである。現代語においては「嵐の中を家を出た」のように、「嵐の中を」部分は「家を出た」の状況を表す成分であり、こういう類に限って助詞重複が可能であることが指摘された。「10時に買い物に行く」の場合も「10時に」は時間、「買い物に」は目的を表していて別の意味役割をなしている。現代語の助詞重複はこのような類にのみ可能であるが、第１部、第２部で指摘した古代語の助詞重複構文は「男ヲ肩ヲヒシト食ウ」のように同じ意味役割を担うにも関わらず、同一述語に係るという違いがある。本論文では古代語では補語の順番が厳密に決まっているのに対し、現代語では順番がそれほど重要ではない代わりに一文中に占める意味役割が一つに限られるのではないかという案を提出した。

結論は以上の本論部分をもう一度纏めたという形態となっている。

学位論文審査結果の要旨

学位論文審査会は平成16年2月16日16時から、学内審査委員4名・招聘審査委員1名によって行った。まず本人より学位請求論文の概要を述べてもらった。次に招聘審査委員、学内審査委員より意見・質疑・応答が行われた。

助詞重複構文そのものは世界の言語のなかではそれほど特殊なものではないが、日本語でこうした構文がかつて存在したということは全く予想していなかったことであり、本論文によって助詞重複構文が広く行われてきた可能性が拓かれたのは注目すべきことである。助詞重複構文が日本語の歴史の中でどのように位置付けられるかは、今後の研究の進展によらなければならないところが大であるが、本研究がその礎となることは間違いないところで、こうした意味において本論文が極めてオリジナリティに富み、長い射程距離を有する研究であることは大いに評価される点であろう。質疑の大部分は本論文の主張を一応は受け入れたうえでの質疑となった。

更にこうした研究を支えた地道な努力も賞賛できる。一つの作品の注釈や用例探索だけでも労力のかかる作業であるが、多くの作品や記録に目を通し、注釈書や研究書に目配りしながら、諸本の中から最も良い本文を選んで、用例を一つ一つ丹念に収集した労力は、当然といえば当然であるが、一方でこれまでの研究者がそういう作業を怠ってきたために助詞重複構文の存在に気づかなかったわけであるから、こうした地道な作業こそ、高く評価してよいと思われる。派手さはないけれども、次に繋がり、時代を超えて残っていく研究といえる。

「～ヲ～ヲ」文、「～ガ～ガ」文、「～ニ～ニ」文、「～ヲバ～ヲ」文などを指摘し、助詞重複構文を総合的に捉えようとする姿勢も、これまで「～ヲ～ヲ」文だけが僅かに指摘されてきたにすぎないことを考えると重要な指摘であり、正しい方向性を持った研究といえる。助詞重複構文は「～ヲ～ヲ」文だけでなく、「～ガ～ガ」文、「～ニ～ニ」文などのように総合的に指摘されて説得力を増すものである。

第1部第1章「二重ヲ格構文」、第2章「二重ニ格構文」、第2部第1章「～ヲバ～ヲ」文は、既に活字論文として公刊、或いは学会発表されている。これらの論文については既に「文学・語学」などの学界時評でも紙面を割いて取り上げられ、一定の評価を得ているといえる。また筆者が最も力を注いだのがこれらの章であり、用例の収集、説明、用法の一般化などにかなりの説得力・妥当性を持っていると評価できる。

以上のように本論文の助詞重複構文の指摘は基本的に受け入れられ、積極的に評価する面はあるものの、一方で次のような問題点の指摘もあった。

（1）「～ヲ～ヲ」文、「～ニ～ニ」文、「～ヲバ～ヲ」文は用例が少ないのではないか。（2）「～ガ～ガ」文は若干の用例が挙げられているが、本格的な考察対象とされておらず物足りない。（3）論文の文章、用例に繰り返しが多いのは工夫の余地がある。（4）「～ノ～ヲ」文の意味分類の「例示・総体」に疑問の余地がある。（5）資料の選択が第2部第1章では漢文訓読資料なども視野に納められていて十分な目配りが行われているが、第1部第1章や第2章では漢文訓読文が調査されておらず、調査資料の選択にばらつきがないか。（6）古代語として纏めずに更に細かく変化はなかったのか、また近世以降、用例がないという証明がほしかった。（7）術語や言葉の使い方に厳密さがあればよかった。（8）現象面の発掘に力を注ぐだけでなく、構文史研究として古代語に絞った研究が望まれる。（9）源氏物語や今昔物語のテキスト選択はどうか。（10）「～ヲバ～ヲ」文が硬い文体や説明的な文章に現れるのは、「～ヲバ～ヲ」文が主題化形式ゆえに、対句や対比的文章に偶々出現しただけの結果論的考察ではないか。

以上の問題点である。（1）の問題については、勿論、用例が少ないから、これまでの研究が助詞重複構文を見逃してきたわけであるが、それぞれ単独では数が少なくとも、「～ニ～ニ」文、「～ヲバ～ヲ」文などとあわせることによって、より説得力を増すであ

ろうと考えられる。しかし本当の問題は用例数の多寡ではなく、（３）（７）の指摘にあるように、本論文の論調にはやや厳密さに欠ける点や冗長な繰り返しがあり、それが論理の展開の緊密さや説得の力強さを奪っている点である。限られた作品や記録から大量の用例が得られなくても、実際にはかつて行われていた例というのは日本語史上、枚挙に暇がないのであり、用例数が少ないからなかったとは言えないのであるが、少ない用例ゆえにこそ、論理の張った文章を書くことが必要とされる。よりよく練られた文章の習得を心がけるべきであろう。

（２）（５）の指摘は最もなことであり、反論の余地はない。しかし、先行研究が７割程度完成しており、それを９割の仕上がり度に引き上げるというタイプの研究が往々にしてあるが、こうしたタイプと違って本論文は、蓄積０ともいえる現象面の発掘から出発し、それを７割程度にまで引き上げるタイプの研究であって、そのために時間や労力の関係から「～ガ～ガ」文の重要性、すべての資料にあたることの重要性は認識しながらも、考察に及べなかった点は一応配慮できる。（６）（８）の指摘にあるような構文史的研究とともに、是非とも今後、力を注いで補っていく必要がある点である。（９）については論文の書き方の点で誤解を与えたり、やや方法的に安易であった点である。（10）については（３）（７）とあわせて、考察にやや甘い点があることと関係しており、あらゆる可能性を考えたうえで考察する態度が必要とされていることを自覚すべきであると思われる。

このように問題点はあるものの、古代日本語に助詞重複構文なるものが存在すること、それは予想を超えて広範囲に「～ガ～ガ」「～ヲ～ヲ」「～ニ～ニ」など、整然と行われていること、「～ヲ～ヲ」を主題化した「～ヲバ～ヲ」があること、助詞重複構文が全体・部分の関係をなしていることなどを指摘・証明したことは、大変独創的で画期的であると評価できよう。本論文では言及されていないが「～ハ～ガ」文研究などへの新しい視点を開拓する可能性があることも指摘された。また課題が次々に立ち現れるということは、助詞重複構文が閉塞的な研究分野に大きな波紋を投げかけることの裏返しでもある。日本語構文史に寄与する研究として発展していく可能性を内包している研究といえる。

審査委員会は、以上のような点を総合的に判断し、本論文を学位論文として認定することについて全員一致で合意した。